

第 48 回全国選抜高校テニス大会視察報告

北海道富良野高等学校 小田切 薫

現任校の富良野高校で 8 年（旧富良野緑峰高校時代含む）、前任校の斜里高校で 10 年テニス部の顧問を務めています。まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。

自分の進路に迷っていた札幌学院大学在学時に、母校の旭川西高時代にテニス部の顧問としてお世話になった澤野先生の勧めで「テニス部の顧問になる」を目標に教職の道を目指しました。

初任校である礼文高校ではバスケットボール部を 1 年、2 年目からはバドミントン部の顧問でした。その後、オホーツク支部の斜里高校にて念願のテニス部顧問となることができましたが、中学校にソフトテニス部がない地域のため、ほとんどの年で部員募集から苦労しました。それでも何度か支部予選をくぐり抜け目標である全道大会へ出場することもでき、当時の自分および全道大会へ進出した選手にとってはとても大きな達成感を得たものでした。しかし、やっとの思いでたどり着いた全道大会のレベルはとても高く、何度か初戦を勝つことはできましたが、シード選手や特に札幌支部の選手との力の差を痛感させられました。

富良野緑峰高校はあまり部活の盛んな学校ではありませんでしたが、近くには旭川支部でも活躍する富良野高校がありました。富良野高校テニス部と対等に競えることを直近の目標にし、旭川支部で勝ち上がることを上位目標と設定しました。地域が変わっても部員不足に悩まされることが多い中、旧緑峰高校時代を含め現富良野高校でも旭川支部を勝ち上がり、全道大会へ進出する機会が増えてきました。そうなる当然、目標は全道大会進出から全道大会での勝利にシフトしていきます。

昨年秋、富良野高校女子は全道大会の団体戦においてベスト 8 と目標以上の結果を残すことができました。このベスト 8 という目標は簡単に継続できるものではありません。正直なところ、全道大会へ駒を進めるのが最大のポイントである点は変わりません。それでも、目標は常に上方修正していきたいと思っています。

今回の視察にて新たな目標を模索して行きたいと思います。

20日(金)11時よりセンターコートにて開会式が行われました。リハーサルで指示があったのか各チームの判断かはわかりませんが、行進の際の手の振り方やかけ声などチームごとに少々の差異はありましたが、観客席にそれぞれのチームユニフォームが綺麗に並ぶ様子はとても見ていて壮観でした。



翌日からの大会は極力北海道の選手の応援に費やしましたが、基本的に1面のみ(後半は2面展開もあり)での展開のため、あまり他地区の選手をじっくり観察することはできませんでした。それでも、全体の中の一部かもしれませんが印象深かったことを挙げていきます。

まずは応援についてです。北海道は歌やリズム感のある応援は禁止していますが、全国ではその制限は特になく、応援はオリジナリティのあるものから全国共通のお馴染みの数パターンで構成されていたように感じました。どの学校もプレーの妨げになることはなかったと思いますが、やはり競った試合は応援も白熱していました。個人的には互いに盛り上がる境遇なら大いに結構ですが、少人数の学校の選手がテニスの技術以外の部分でやりにくくなってしまふのには疑問を抱きます。その点においては、北海道は現行のままが良いと思います。

次は審判についてです。全国選抜は主審の他に3名(QFからは5名)の線審が付きますが、きわどい判定はありました。ある対戦のセットカウント2-1でD2の5-4の開始場面でそれは起こりました。リードしている側が放ったロブが相手コートベースライン付近に落ちました。私からは内側に見えましたが、主審はアウトをコールしました。選手・監督ともに詰め寄りましたが、主審のジャッジは当然覆りません。ここで重要なことは、ジャッジが誤審であったかどうかではなく、主審が大きな声で毅然とした態度で進行したため大きな問題に発展しなかったことです。選手は不服そうではありましたが次のプレーに入ります。このプレーがその後に影響したかどうかは本人たちにしかわかりませんが、このD2は

逆転負けを喫してしまいました。人間である以上、誤審やルールの解釈を間違えたりすることはあるかもしれませんが、選手や観客を納得させる唯一の手段が精一杯大きな声で審判を務めることなんだと感じさせられたのと同時にプレーする選手は気持ちの切り替えもまた重要であると感じました。

最後は意識の差です。今回、大会に出場するチームの紹介動画を全て観ました。あくまでもそこで話していた内容からの判断ですが、ベスト4に入賞した男女8校のうち7校が動画内で「優勝」を明言していました。初回戦で敗退したチームのなかにも「優勝」や「ベスト8」等の具体的な目標を明確にしているチームは複数ありますが、全参加チームの半数以上は「全力を尽くして・・・」や「一生懸命・・・」と言った内容が目立ちました。もちろん具体的な目標を動画内で発信していなくても明確な目標は存在していると思います。地区を勝ち上がってきた強豪チームといえども、自分たちの実力を冷静かつ客観的に分析すれば簡単に「優勝」とは口にできないのでしょうか。ただ、優勝を目指すチームと初回戦突破を目指すチームが対戦した場合、すでに勝敗は決しているように感じます。これはそのまま全道大会にもスライドして当てはまっているのではないのでしょうか。全道大会上位進出常連校は優勝して全国大会出場を目指し、全道出場常連校はベスト8、なんとか支部大会で出場権を得た初出場校は全力を尽くす等、至極当然のことだと思います。しかし、現在ある支部間の実力差が縮まり、どのチームも全道大会にて実力が拮抗するようになれば、北海道の高校テニス全体のレベルアップにつながるのだとも考えます。

高校からテニスを始めた選手にいきなり全国を意識させるのは難しくても、支部大会の先にある全道大会は多くの選手が意識しているはずです。そこで全国を目指すチーム・選手と対戦・交流することで全国の雰囲気の一部が伝わります。今回、私が全国選抜で見聞きしたことを選手に伝えるのも全国を感じさせる一歩だと思います。実力は遠く及ばなくても全道大会のその先にある全国大会をほんの少しでも具体的に意識する（技術だけでなく取り組む姿勢等）ことが重要で、逆に支部大会で敗退するチームでもテニスが好きで一生懸命プレーしている選手たちが多くいて、その代表としての自覚を持った選手たちの集まりが全国大会であってほしいと願います。

最後に今回このような貴重な機会を与えてくださった方々に改めて感謝を申し上げます。これからも北海道の高校テニスの発展に微力ながら尽くしていきたいと思っています。